

西原土地区画整理事業第Ⅰ工区第12次調査報告書

なかこし
中越遺跡

長野県上伊那郡宮田村

1993

宮田村遺跡調査会

西原土地地区画整理事業第Ⅰ工区第12次調査報告書

なか　こし
中越遺跡

長野県上伊那郡宮田村

1993

宮田村遺跡調査会

序

昭和31年、宮田村における初めての学術調査が実施されて以来、昭和59年まで14次にわたる発掘調査をしてきた中越遺跡では、その後、西原土地区画整理事業の進行にあわせて、11次をこえる調査を実施し記録保存をはかってきており、平成4年度も、区画整理の第1工区内の2箇所で、工事に合わせて、発掘調査を実施しました。今日までの成果から、縄文時代中期の集落の範囲であると推定されていた調査地点からは、その時期の住居が5軒みつかり、推定を裏付ける資料を得たわけですが、それ以外に、中越遺跡では初見となる平安時代の住居と、この地点にはないとされてきた縄文時代前期の住居を1軒づつ発見するという予想外の成果をあげることができました。またこれに先立って実施した消防防火水槽埋設に伴う調査では、縄文時代中期から後期初めにかけての包含層を検出するとともに、地形の微細な変化を知る資料を得ました。

道路の拡幅部分を調査する所が多いということで、当初、様々な困難が予想されたのですが、幸い、地元の皆さんと工事関係者の御理解と御協力により、初期の目的を果たすことができました。それらの皆さんと、宮田村遺跡調査会会长友野良一先生をはじめとする、現場での作業にあたられた多くの皆さんに感謝申し上げ、刊行の言葉とする次第であります。

平成5年3月31日

宮田村教育委員会

教育長 林 金茂

例　　言

1. 本書は、平成4年6、7月に実施した、消防防火水槽埋設と西原土地区画整理事業に伴う中越遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、宮田村長の委託をうけ、宮田村遺跡調査会が実施した。
3. 年度内に刊行しなければならない必要もあって、報告書の内容は、資料を示すことに重点をおいてある。
4. 報告書中の遺構実測図や遺物実測図、拓影図は次のように縮小率を統一した。
遺構全体図……1/1000 住居址……1/80、1/60 繩文土器実測図……1/4 拓影図……1/3
石器実測図……2/3、1/4
5. 本調査にかかる記録や図面類、出土遺物は、宮田村教育委員会が保管している。

目 次

序

例言

第1章 遺跡の概観と調査の経過	1
第1節 遺跡の立地	1
第2節 調査の経過	3
1 調査にいたるまで	3
2 調査の組織	3
3 調査の経過	3
4 遺物の分類について	4
第2章 遺構と遺物	5
第1節 村道206号線（中越南線）	5
1 遺構検出状況	5
2 縄文時代の遺構と遺物	5
(1) 205号住居址 (2) 206号住居址 (3) 溝 (4) 遺構外の遺物	
3 平安時代の遺構と遺物	12
第2節 村道775号線	13
1 遺構検出状況	13
2 縄文時代の遺構と遺物	13
(1) 207号住居址 (2) 208号住居址 (3) 209号住居址 (4) 210号住居址	
(5) 遺構外の遺物	
第3節 防火水槽埋設地点	32
第3章 発掘調査の成果	37

第1章 遺跡の概観と調査の経過

第1節 遺跡の立地

中越遺跡は、天竜川右岸に発達した太田切扇状地の、北側の扇側部に位置し、扇端である天竜川河岸から遺跡の中心部までは、約1kmを測る。この扇状地面は、小河川によって放射状に開析され、いくつかの長峰状の台地の連なりとなっており、遺跡の位置は、大沢川と小田切川の間の台地上の、大沢川がその侵食面を明確にし始める地点でもある（図1）。

大沢川と小田切川の間に形成された台地の上面は、両河川の侵食等によって、様々な変化をみせているのだが、遺跡付近では、台地南縁に部分的に形成された低位面と、北の広い高燥面とで構成されており、後者はさらに、やや低い南側と、高い北側に分けることができる。

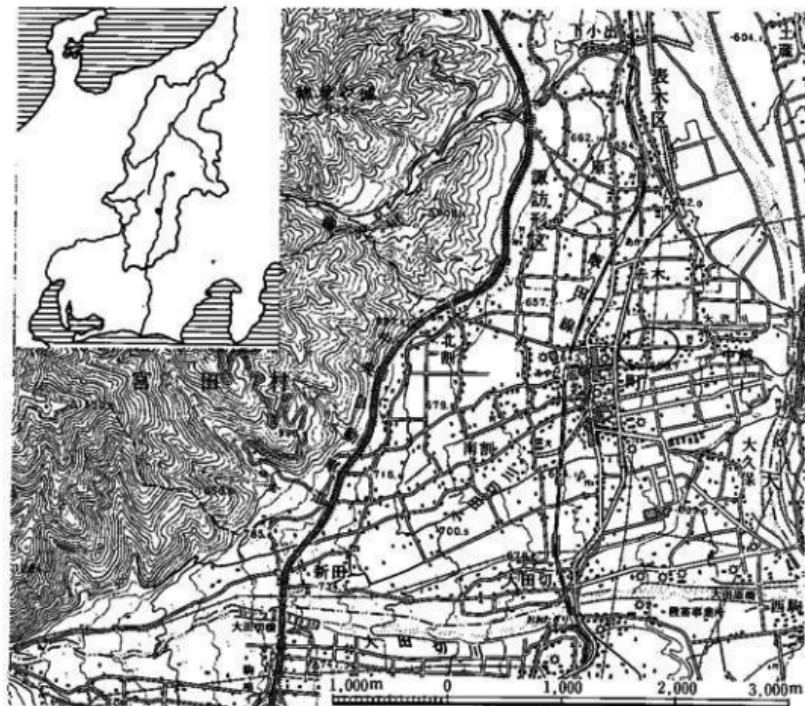


図1 位置図（5万分の1）

遺跡の範囲の台地上は、現在は東へゆるく傾斜する平坦面となっているが、今日までの発掘調査で、東流するいくつかの小さな流れや溝が確認されており、腐埴土層の厚さが極端に薄い地点などもあることから、当初は、もう少し起伏に富んだ地形であったと想定される。今回の調査でも、台地南縁ちかくで、表土下が完全な礫層となる地点や縄文中期の遺物が入りこんでいる溝などがみつかっている。少し前まで、石積みを設けて畑を平坦に整地した痕が所々に見られ、現地形は、かなり整地された後の姿ということができよう。

遺跡付近の表土あるいは耕作土の下は、黒褐色土、褐色土、黄褐色土、を経て黄色土に移行するのが一般的であり、腐埴土の深い地点では、黒褐色土の上に黑色土が存在し、浅い地点では、黒褐色土、次いで褐色土が欠けるかごく薄い。黄色土の下には、太田切層状地を構成する拳大から人頭大、さらにはひとかかえもある巨大な礫が存在しているのだが、腐埴土の浅い地点では、それらの礫が表土下に顔を出している所もある。

中越遺跡には、高燥な台地北縁に展開する縄文時代前期の集落と台地南縁に連なる縄文時代中期の集落、南の低位面に位置する縄文後期の墓域と考えられる集団遺構までが含まれており、結果としてその規模は、約24haと広大なものとなっている。

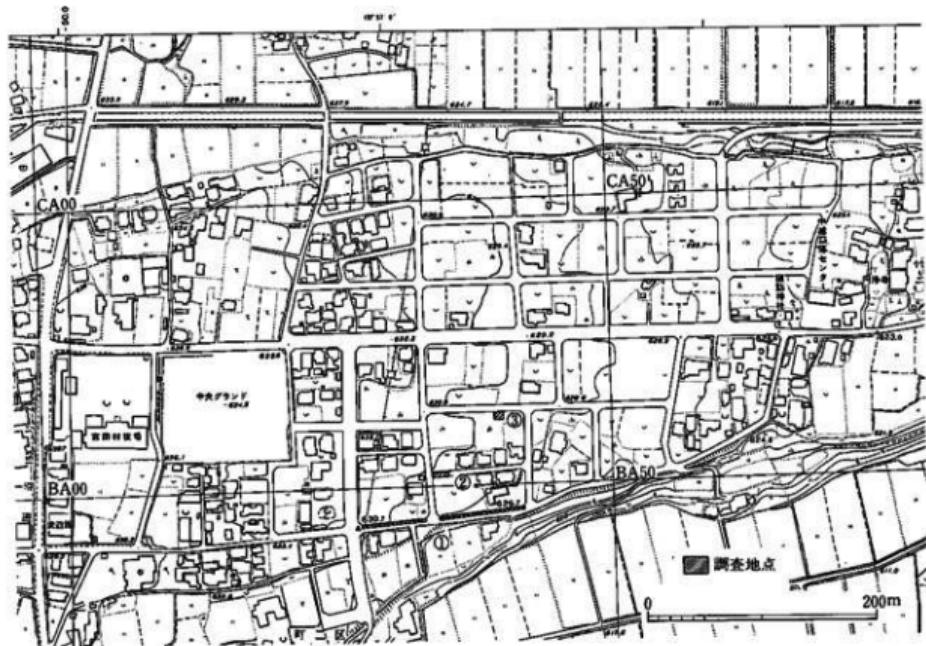


図2 調査地点図（「宮田村平面図」—平成元年12月作成をもとに作図）

第2節 調査の経過

I 調査にいたるまで

昭和54年に策定された西原土地区画整理事業は、昭和62年に着工にいたり、現在も継続中であるが、それに伴って埋蔵文化財を保存する必要が生じたため、宮田村教育委員会では、宮田村遺跡調査会を組織し、発掘調査を実施して記録保存を図ってきた。

本報告の平成4年度の調査は、第12次西原地区埋蔵文化財発掘調査として実施された。平成4年4月23日、宮田村長伊藤浩を委託者、宮田村遺跡調査会会长友野良一を受託者、宮田村教育委員会教育長林金茂を立会人として委託契約を結び、契約では、埋蔵文化財の発掘調査と報告書の作成を業務内容とし、平成4年4月23日から平成5年3月10日までを委託期間としている。

調査地点は、村道206号線（中越南線）の、東線との交差点から東の拡幅部分の調査可能な範囲（図2の①）と、村道775号線の新設部分の一部、西端から14mの範囲（図2の②）である。

一方、同工区内の児童公園に消防の防火水槽を埋設する工事が予定されたため、区画整理事業に伴う調査に先立って、その部分（図2の③）を調査している。

2 調査の組織

今回の遺跡調査にかかる組織と、現場の発掘調査に参加され、実際の作業をして頂いた作業員の皆さんは次のとおりである。

◇宮田村遺跡調査会	◇宮田村教育委員会	◇調査参加者
会長 友野 良一	教育次長 小林 守	伊藤 茂子
委員 宮木 芳弥	係長 古河原正治	木下 道子
〃 片桐 貞治	係 小池 孝	小田切守正
〃 平沢 和雄		酒井 鶴子
〃 青木 三男		白鳥あき子
〃 伊東 駿一		西村アグ子
〃 唐木 哲郎		林 美弥子
教育長 林 金茂		松下 末春

3 調査の経過

区画整理事業に伴う調査での現場における発掘作業は、平成4年7月1日から8月1日まで実施した。はじめに村道206号線の拡幅部分を西から調査し、引き続き村道775号線を調査したのだが、村道206号線の拡幅部分では、生活道路を完全に通行止めにはできないことから、数mから十数mの区間を調査しては埋め戻す方法を取らざるをえなかった。村道775号線では、隣接する土地

所有者の理解のもとで徐土置場が確保でき、調査予定地全面を一度に調査している。

その結果、台地南縁にそって走る村道206号線の拡幅部分では、縄文時代中期後葉の住居址2軒、溝2と、中越遺跡では初見となる平安時代の住居址1軒が検出され（同時代の遺構は平成2年の西原区画整理に伴う第10次調査でピット1基がみつかっている）、あわせて表土下の様子から、現在は南東方向にほぼ一定の傾斜となっている一帯が、少なくも縄文中期末ころまでは、西側がかなり高かったことも明らかとなった。一方村道775号線の西端の調査では、3軒の縄文時代中期の住居址とともに、縄文時代前期中葉の住居址が1軒検出された。該期の集落からは遠く離れた地点であり、中越遺跡での縄文時代前期の集落の終焉期の遺構であることもあって、その存在は極めて興味深い。

消防防火水槽埋設工事に伴う調査は、前記の調査に先立つ6月18日から25日まで実施した。やや北に傾きながらもほぼ平坦な用地には、遺構は検出されなかったものの、用地東端により濃密に繩文中期から後期初めにかけての遺物包含層があり、その下面是北東方向へかなり強く傾斜しており、調査地点が、現地形で見えていた東西に走る溝の、南の縁にあたることを確認した。

連蹄地に設定されているグリッドで表わすと、村道206号線の拡幅部分がA V28~A Y42グリッド、村道775号線の西端がB A34~B B35グリッド、消防防火水槽埋設地点がB F40・B G40グリッドということになる。

平成4年度に調査した遺跡の整理作業は12月に開始し、報告書は平成5年の3月末をもって刊行にいたった。

4 遺物の分類について

本報告書における遺物の分類は、「中越遺跡発掘調査報告書」(宮田村教育委員会1990)での基準と呼称をそのまま使用している。ただ、縄文中期の土器の時期区分については、「長野県史考古資料編(四)遺構と遺物」に従った。

また、遺跡地には、昭和53年に10m方眼のグリッドが設定されており、今回もそのメッシュを使ったが、地区の呼称は、グリッド設定当時のものでなく、「中越遺跡発掘調査報告書」(宮田村教育委員会1990) のものを使用した。

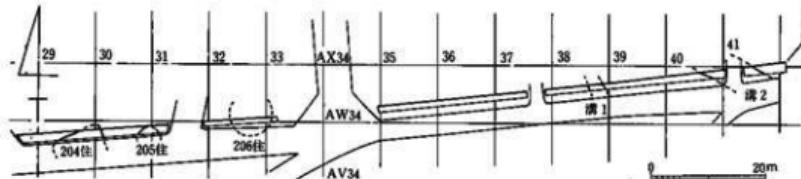


図3 村道206号線（中越南線）遺構全体図

第2章 遺構と遺物

第1節 村道206号線（中越南線）

I 遺構検出状況

調査は道路北側の拡幅部分を、細いトレンチ状に掘って実施した。その結果、調査範囲の西方で2軒の縄文時代中期の住居址と1軒の平安時代の住居址、東方で縄文時代中期の遺物が入る溝2基を検出した（図3）。住居址がいずれも現道によって床面まで破壊されていたため、道路部分は調査していない。また検出された遺構以外に包含層と呼べるようなものはなく、特に、206号住居址から溝1にかけては、表土下がすぐに黄色の疊層となってしまっており、今は南東方向にゆるく傾斜している調査地点も、部分的には相当土が動かされている印象を受けた。

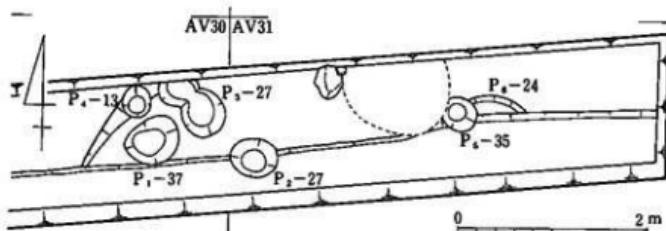


図4 205号住居址実測図

2 縄文時代の遺構と遺物

(1) 205号住居址

AV30・31グリッドの黄褐色土上面で、北西の壁の一部と考えられる落ち込みがみつかり、その東に一段低い平坦面が存在したことから住居と考えたが、その平坦面はP₃の西までしかなく、大部分が破壊され、北のごく一部が残っているだけということになる。床に貼られていた痕跡がなく、掘りこみが浅いことになるなどやや難があるが、P₁やP₃といったしっかりしたピットを伴うことや遺物もある程度出土していることから、住居址とした。なお、破線の範囲は、肥料貯めを埋めた際破壊されている。遺物は少ないが（図5、6）、土器に縄文中期後葉Ⅰ期の大破片があり（図6-11）、その時期の遺構と考えていいだろう。

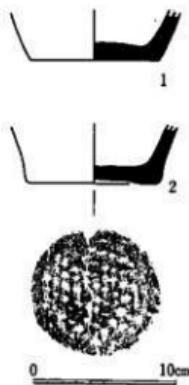


図5 205号住居址
出土土器実測図

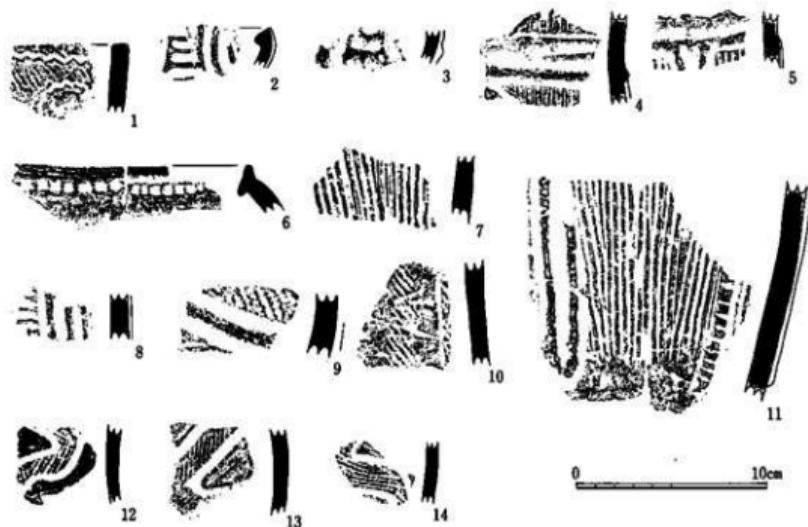


図6 205号住居址出土土器拓影

(2) 206号住居址

AW32グリッドに検出されたが、道路拡張部分がごくわずかであったため、住居址の中央南寄りに細いトレンチを入れた状態でしかない(図7)。平面が円形に近い大型の住居址となろう。ただ、南側は道路開設時にすでに破壊されている。また、表土下がすぐ黄色土となっており、掘りこみはかなり深かったものと考えられる。床のレベルはもともと礫やまったくの砂地で、床面には粘土質黄色土を貼ってある。東の壁下と西の壁から少し内側に周溝がある。用地北壁にわずか見える掘り鉢状のピットが、石を抜き取られた炉の跡であろう。

狭い範囲の調査の割には遺物は多い(図8、9)。土器は頸部がゆるくくびれるキャリバー型

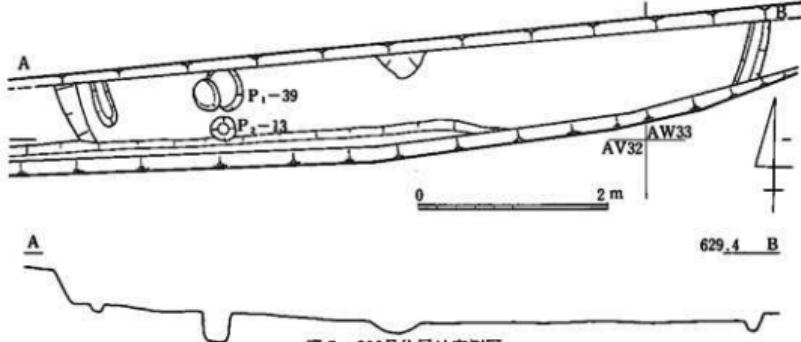


図7 206号住居址実測図

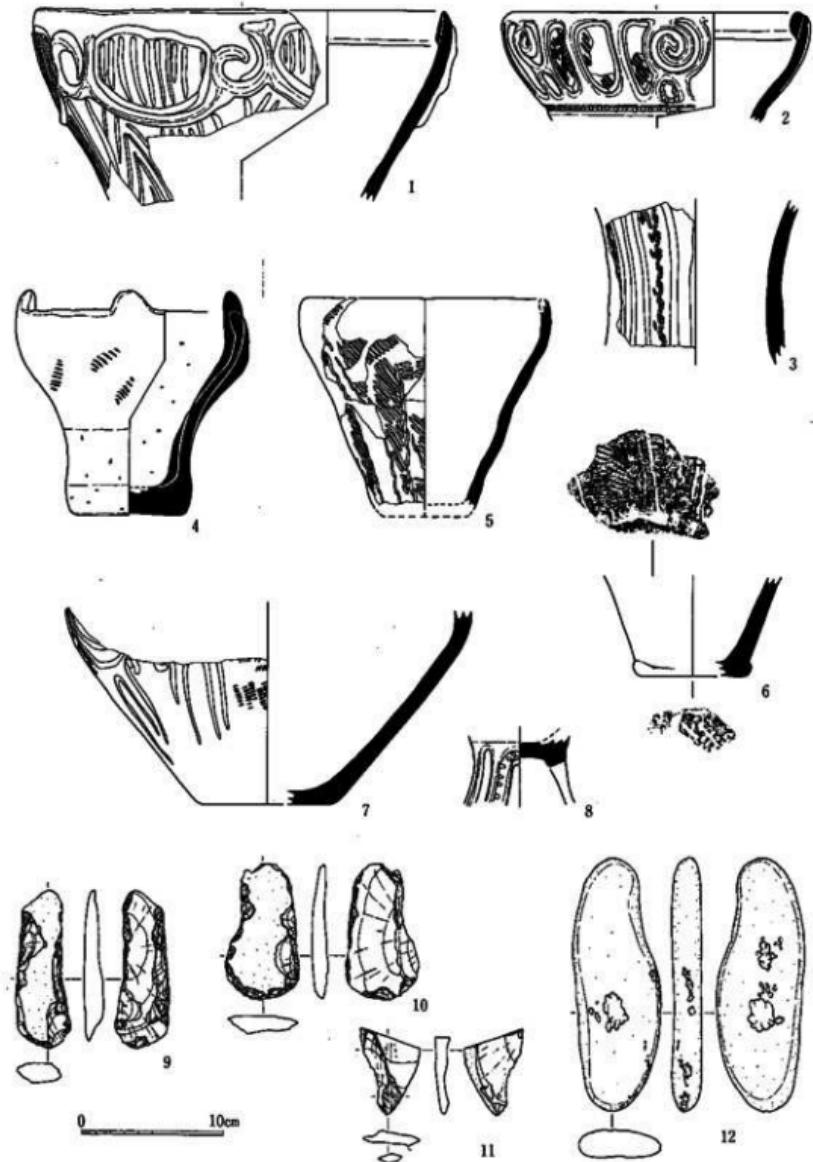


图 8 206号住居址出土土器、石器实测图

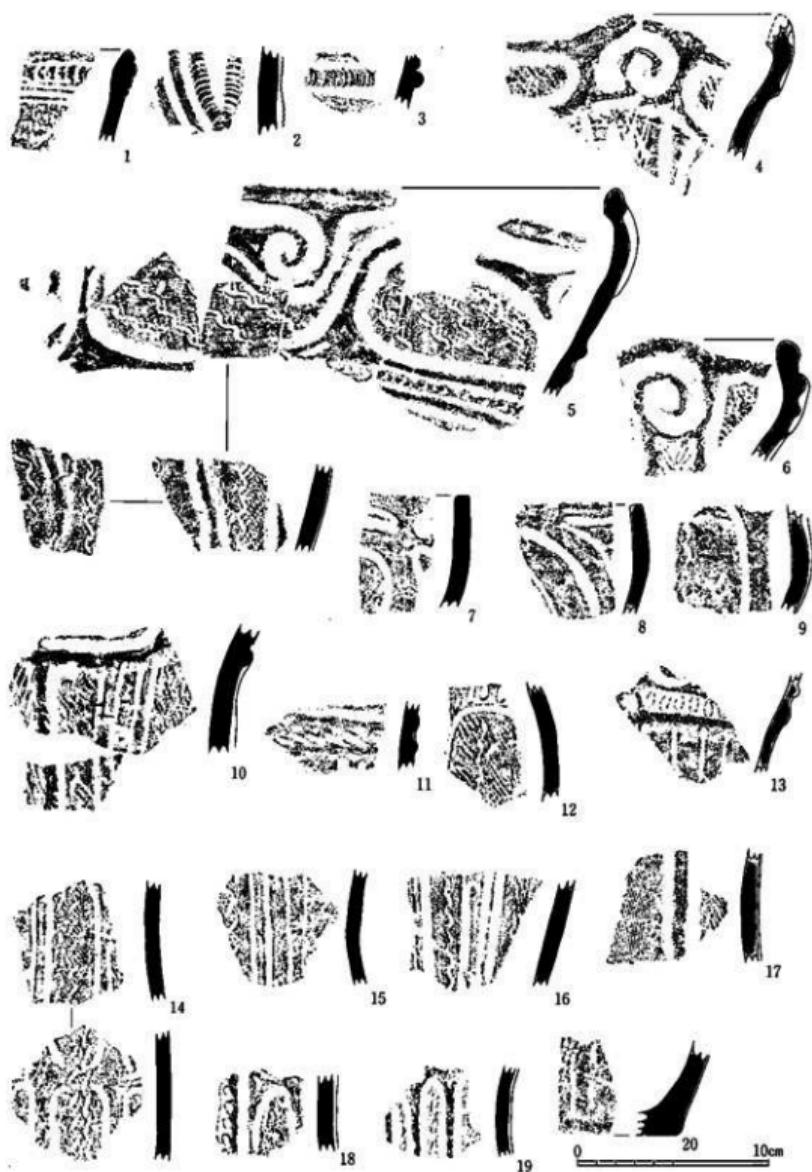


图9 206号居住址出土土器拓影



図10 溝1出土土器拓影

で、口縁部を渦巻き文を伴う隆蒂で横位に、腹部を沈線や低い隆蒂で縱位に区画し、地文に結節繩文を多用するものが主体である。唐草文系はきわめて少ない。図8-4・5は、器形や施文が粗略な点が特異で、7は浅鉢もしくは壺となろう。石器には、打製石斧(9・10)3点、凹石(12)1点、叩石1点のほか、粗大な剣片に研磨の痕跡のあるもの(11)などが出土している。

所属時期は土器から繩文中期後葉Ⅲ期の新しい段階となろう。

(3) 溝

溝1はごく浅く、断面で観察してもあまりはっきりしない程度のものだったが、土器片とともに中期後葉Ⅰ期の土器(図13-1)が広い範囲から出土した。一方溝2は、ちょうど中央部に道

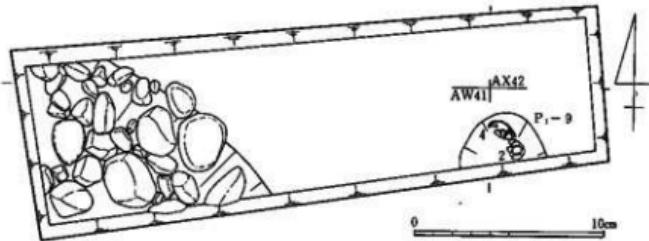
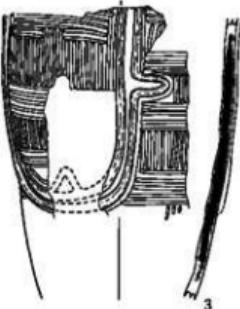
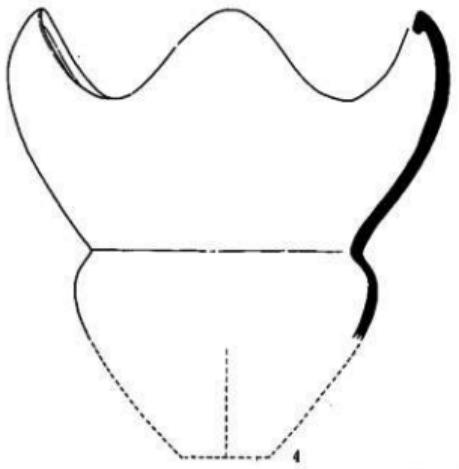
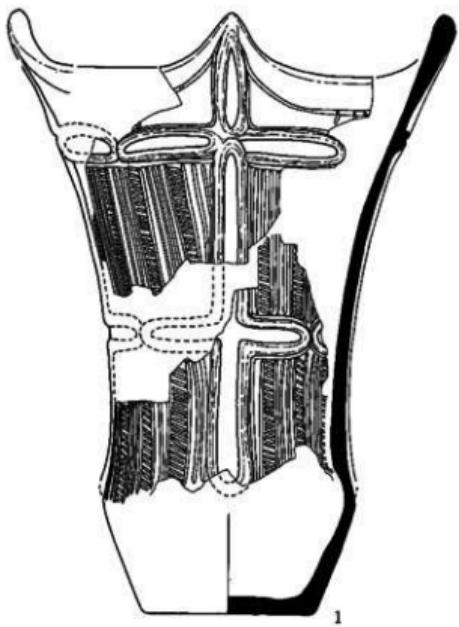


図11 溝2東縁実測図



図12 溝2出土土器拓影



0 10cm

图13 薄1、2出土土器实测图

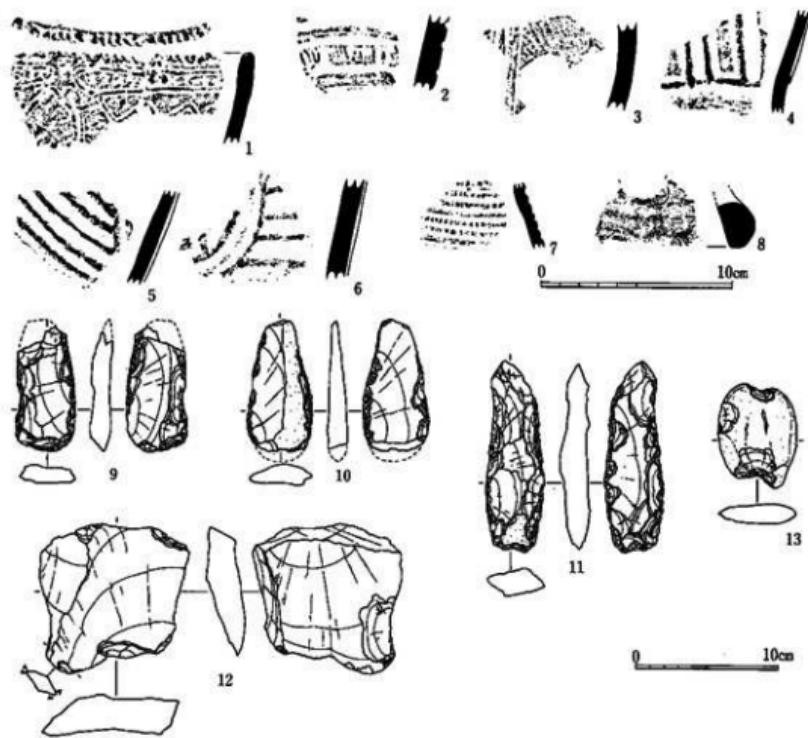


図14 村道206号線（中越南線）遺構外出土土器拓影、石器実測図

路があって調査できず全体を見ることができなかつたが、南東方向に向かう深いもので、東縁の状況をみると(図11)、溝の壁はゆるやかに立ち上がり、人頭大よりさらに大きな礫が底をびっしり埋めている。付近からは中期初頭から晩期までの土器片が出土しているが、溝2の東2mには浅いピットがあり、中に3個体の縄文中期後葉I期の土器(図13-2~4)が逆位に置かれた状態にあった。4については発掘時に2と同一視していたため出土状態までははっきりしないが、あるいは2の土器にかぶせるような状態であったかもしれない。ごく狭い範囲の調査であり、溝2が人工のものか否かまでは不明とせざるを得ない。

(4) 遺構外の遺物

206号住居址から溝1までの表土下がすぐ礫層となってしまう地域以外から、少量の土器と石器が出土している(図14)。土器は縄文中期初頭から中期後葉I期までで、量的には中期後葉I期が主体である。12の粗大な硬砂岩の剥片は、突出部の両縁辺が、肉眼でわかるほどはっきりと擦れている。

3 平安時代の造構と遺物

○204号住居址

A V29グリッドに検出し、平面形が北東方向に長軸をおく長方形の、大型の住居址になると考えられる。北西の壁はしっかりしていたが、床のレベルが完全な礫層にあたり、床面中央のごく一部が、粘土質黄色土ブロックがわずかに混じる黒褐色で貼ってあるだけだったため、住居であるとの判断に手間取ってしまった。壁下が床面よりわずかであるが低くなつており、周溝とみれなくもないが、断定はできない。柱穴や竈もみつかっていない。

遺物は図16に図示したものがほとんどすべてで、黒色土器の杯（5～8）を中心に光が丘1号窯期の灰釉陶器（1、2）と、須恵器（3、4）、土師器（9）黒色土器らしい耳皿（10）のは

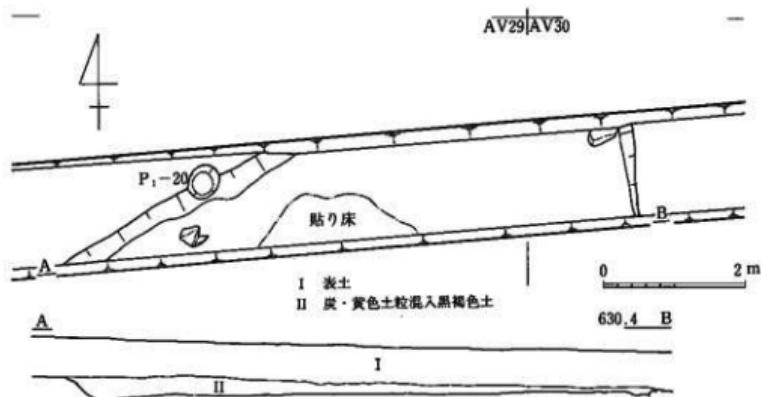


図15 204号住居址実測図

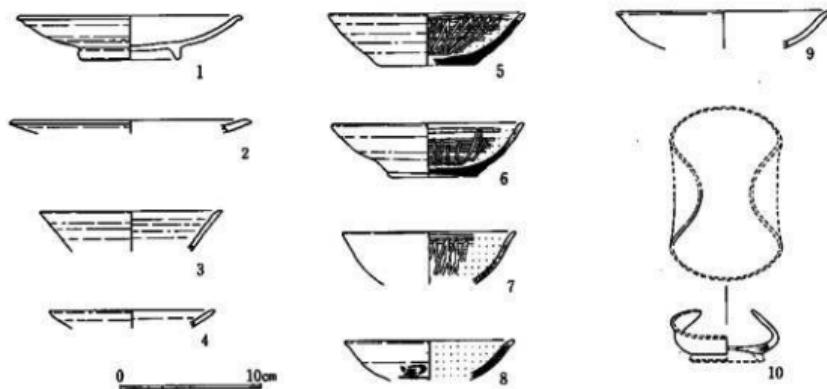


図16 204号住居址出土土器実測図

か、図示できなかったが土錐の破片が1点出土している。1の底が硯に転用されており、8には「里」と読める墨書きがある。灰釉陶器の年代と墨書き土器の存在から9世紀末か10世紀初めの住居址である。

第2節 村道775号線

I 遺構検出状況

村道206号線（中越南線）拡幅部分の中間点あたり、包含層まで削平されてしまっている地点から北へ40mほど入った地点の、東西13.5m、南北4～5mの範囲を調査し、1軒の縄文時代前期の住居址と3軒の縄文時代中期の住居址、それに多くのピットを検出した（図17）。

今回の調査に先立ってすぐ北の宅地部分を調査し、その用地南端に住居址を検出しており、位置的には、東西に長い縄文時代中期の集落の、北縁に近い地点ということだろう。

2 縄文時代の遺構と遺物

(1) 207号住居址

BB34とBB35グリッドにまたがり、南端に検出された。北端が用地外となっているため推定だが、平面形は、南北に長軸をおく隅丸長方形となるであろう。南東隅を208号住居址によってわずか切られており、短辺の長さは4mを測る。用地北壁の観察によれば住居は表土下の褐色土から掘り込まれているが、埋土上層のⅢ層と周囲のⅡ層との区別が困難であったため、遺構のプランは、Ⅲ層下まで削らないと明確にすることはできなかった。床は粘土質黃色土で貼り、周溝が壁下を廻っているが、東壁下の大部分ではそれを検出することができなかった。またその部分では、壁や床自体も面としてとらえたとは言い難い（土層図では東壁に黃褐色土の入る小さな凹みがあるが溝ではない）。床面には多くのピットがある。位置などからP₁、P₇、P₉、P₁₁が柱穴と

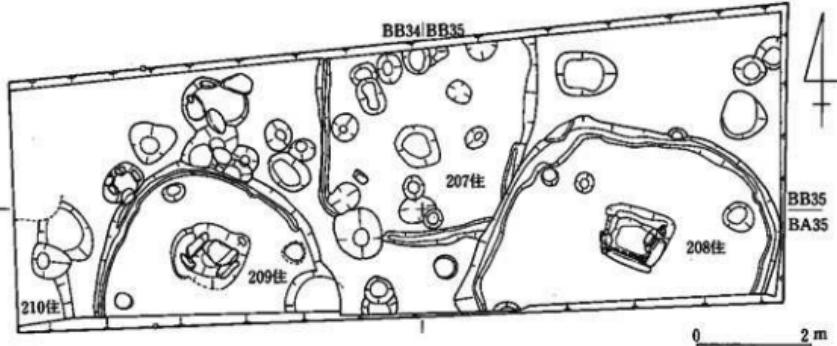


図17 村道775号線遺構全体図

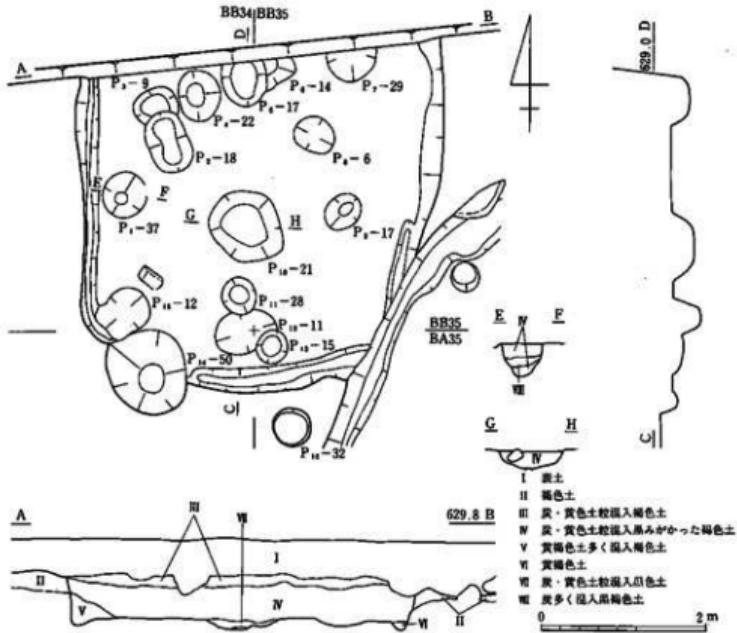


図18 207号住居址実測図

なろう。また炉は地床炉で、埋土からみてP₅とP₆がそれであろう。P₁₂内からは図20-1の土器が出土している。

遺物はそれほど多くない。土器は、住居廃絶直後に埋土に廃棄されたものと、一定の時間ののち入り込んだものの二者がある。前者（図19-1～3、図20）は縄文前期中葉の土器で、幅の狭い折り返し口縁の、小さな平底の砲弾形の器形をもち、胴部には一つの原体を縦位と横位にころがした不規則で雑な縄文が施されている。折り返し口縁には、棒状工具（図19-1）や櫛齒状工具（図20-1）による刺突文もあるが、胴部と同じ原体の縄文を施文するものが多い。後者（図19-4～7、図21）は縄文中期後葉の土器で、量的にも、I期の蒸し器の大破片が多い。このことは、前期中葉から中期後葉の初めまで住居の跡は凹地で、中期後葉の早い時期にそれが埋まつたと考えられ、住居廃絶後の豊穴の埋没過程やそのことと人間との関わりといったことまでも推定できそうである。

石器は、7点の石鏃（図22-1～7）のほか、打製石斧（8、9）3点、横刃型石器（10～12）5点、磨製石斧（13）2点、敲打器（14）1点、礫石錐（15）1点と、小量の黒曜石の剥片類が出土している。黒曜石は夾雜物の多い粗悪なものが多い。

所属時期は縄文前期II期のうち神ノ木期のあとで阿久三期の前、すなわち有尾期となろう。

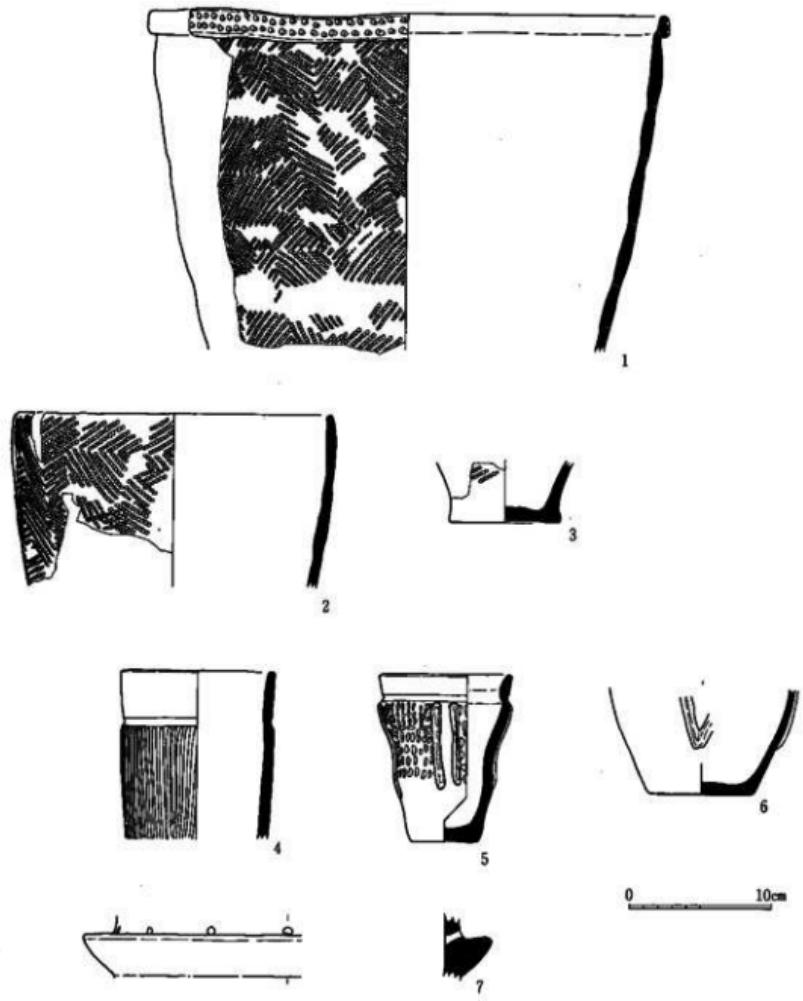


图19 207号住居址出土土器实测图

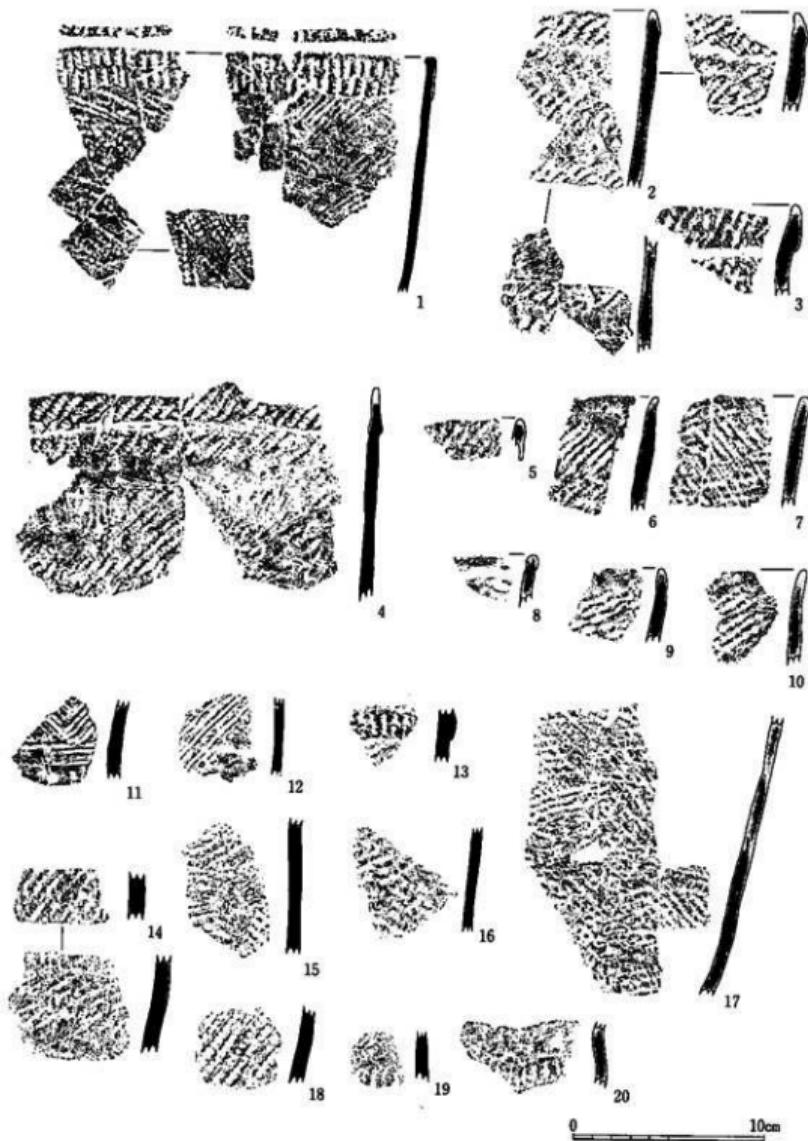


图20 207号住居址出土土器拓影(1)

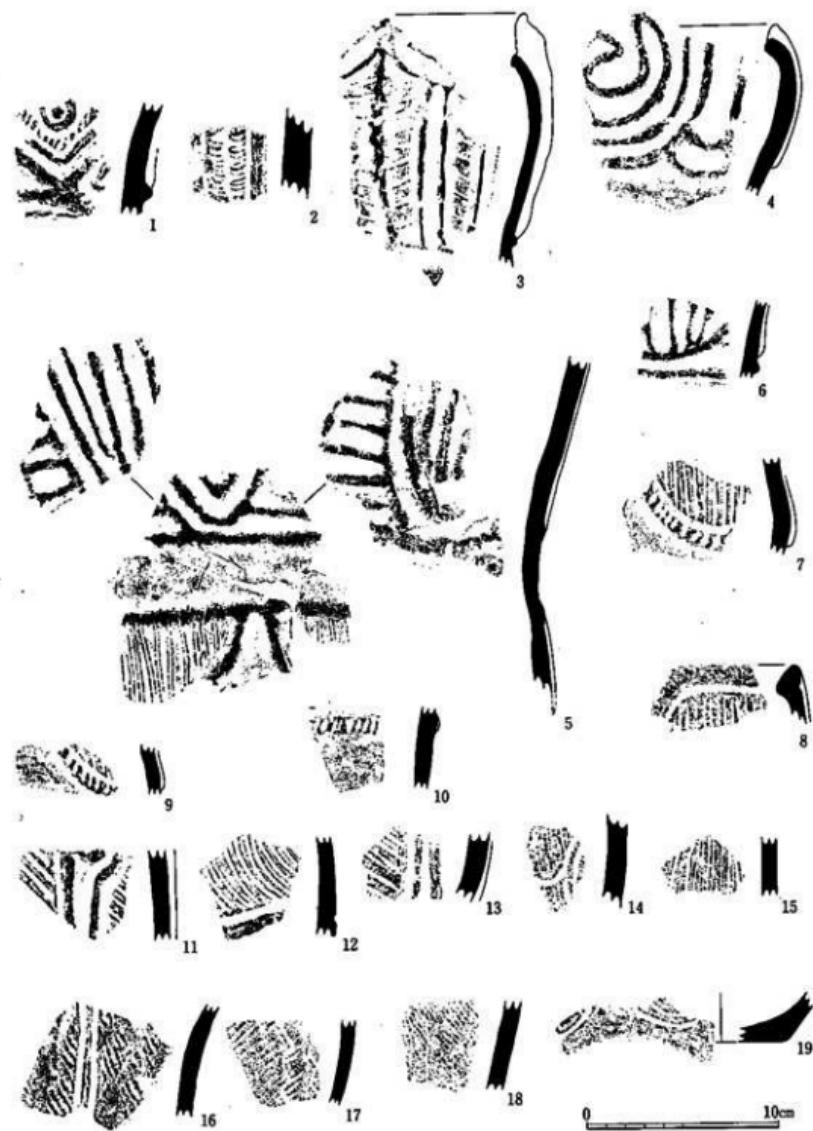


圖21 207號住居址出土土器拓影(2)

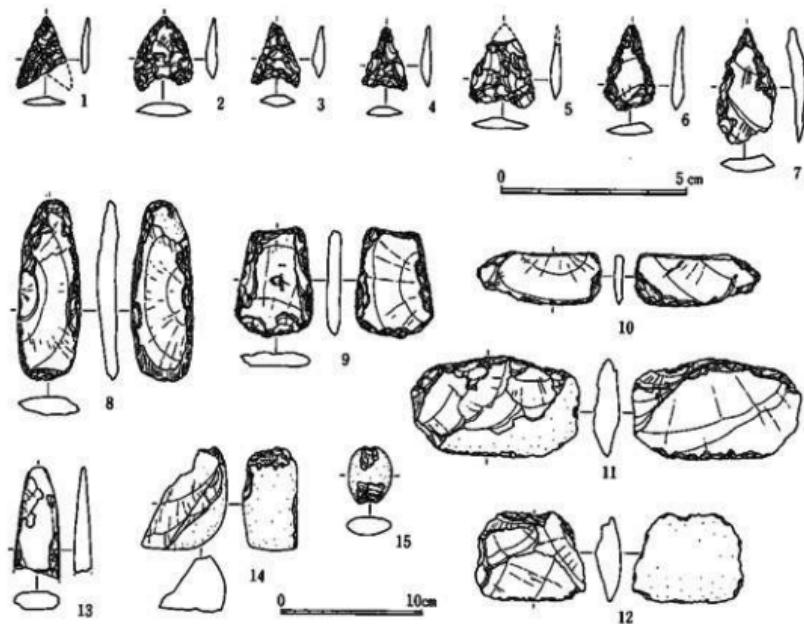


図22 207号住居址出土石器実測図

(2) 208号住居址

B A35グリッドの北西隅に位置し、207号住居址の南東隅を切っている。南側が用地外にのびているため推定だが、平面形が五角形に近く、径5m強程度の規模となろう(図23)。各辺は直線に近いようである。住居は表土下の褐色土から掘り込まれており、埋土には、炭の混入する褐色土の上に、人頭大礫と炭の混入する黒みがかった褐色土がレンズ状に入り込んでいる。

床面は粘土質黄色土が貼られていて堅く、壁下には幅の広い周溝がめぐっている。柱穴は検出部分で頂点の内側のP₁、P₃、P₄の3本が相当すると考えられることから、5本柱と推定される。P₁で柱痕跡状の土色の違いが観察された。炉は掘炬壺状の石囲炉で、北側半分の炉石が抜き取られていたが、残った部分を見ると、炉は、方形の穴の壁に平石を立て、下にいくつもの礫をかって構築されていた。炉内には、ごくわずかの焼けた部分が残されていたにすぎない。北の壁外には大型で深いピットがある。

遺物が多い。土器の主体は唐草文系の樽型土器(図24-2・4・5・6、図26-10、図27-1など)と、頭部がゆるくくびれ、胴部を縦位に区画するキャリバー型土器(図24-1、図25-1、図26-11、図27-4・5など)で、後者の系統には鉢(図25-2)や全面に縄文を施す大型の深鉢(4)もある。図24-3は加曾利E系である。

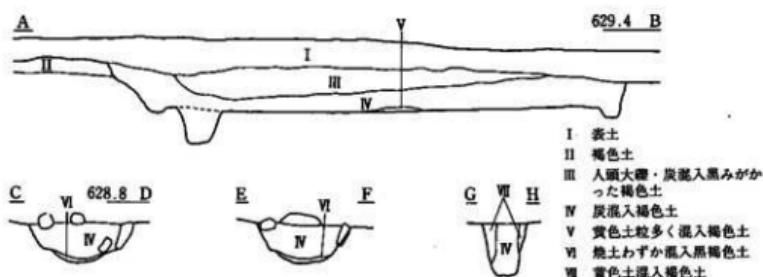
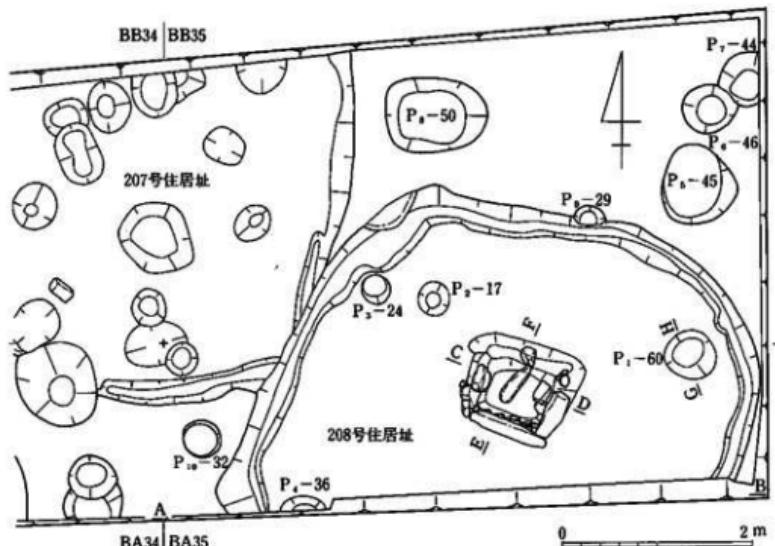


図23 208号住居址実測図

石器は、打製石斧（図29-1～5）10点、横刃型石器（6～10）7点のほか、磨製石斧（11～12）2点、礫石錐1点、敲打器（14）1点が出土している。13は方柱状の礫の稜の一つを磨ったものであり、15の粗大な剝片の縁には、縁辺と平行した明瞭な使用痕が観察される。

所屬時期は、土器から縄文中期後葉II期の新しい段階としていいだろう。

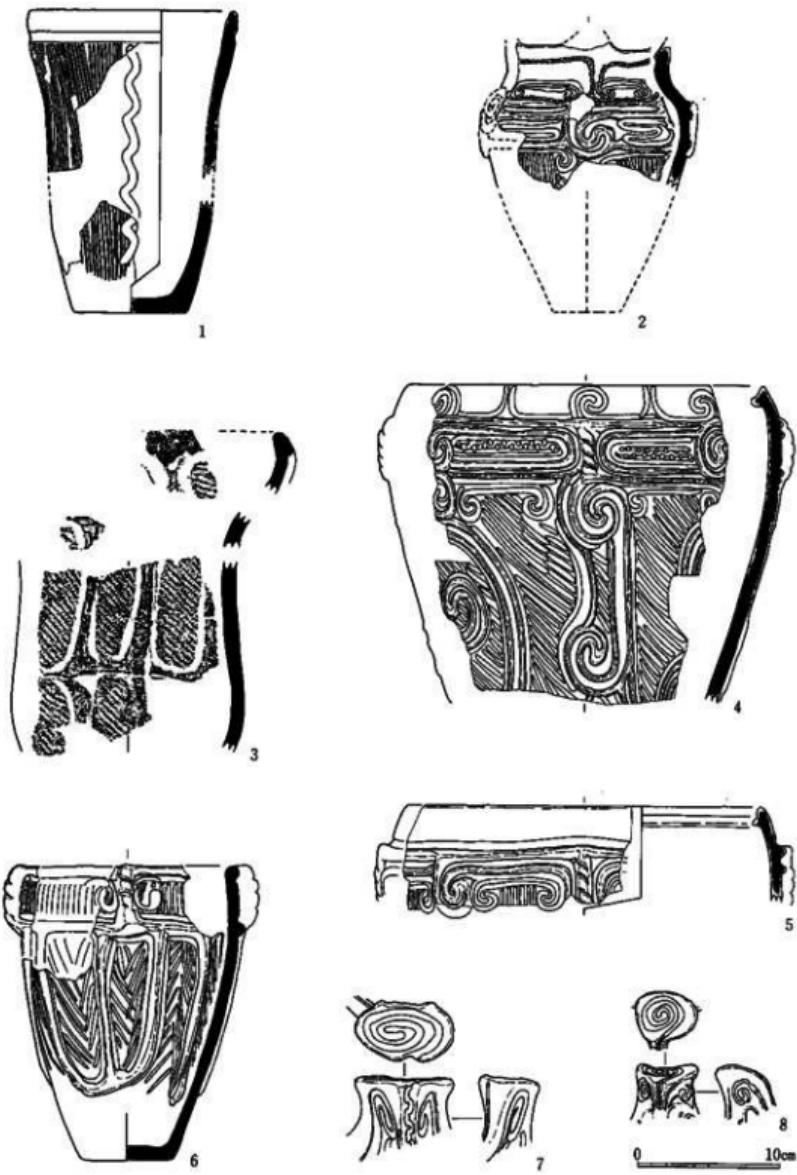


图24 208号住居址出土土器实测图(1)

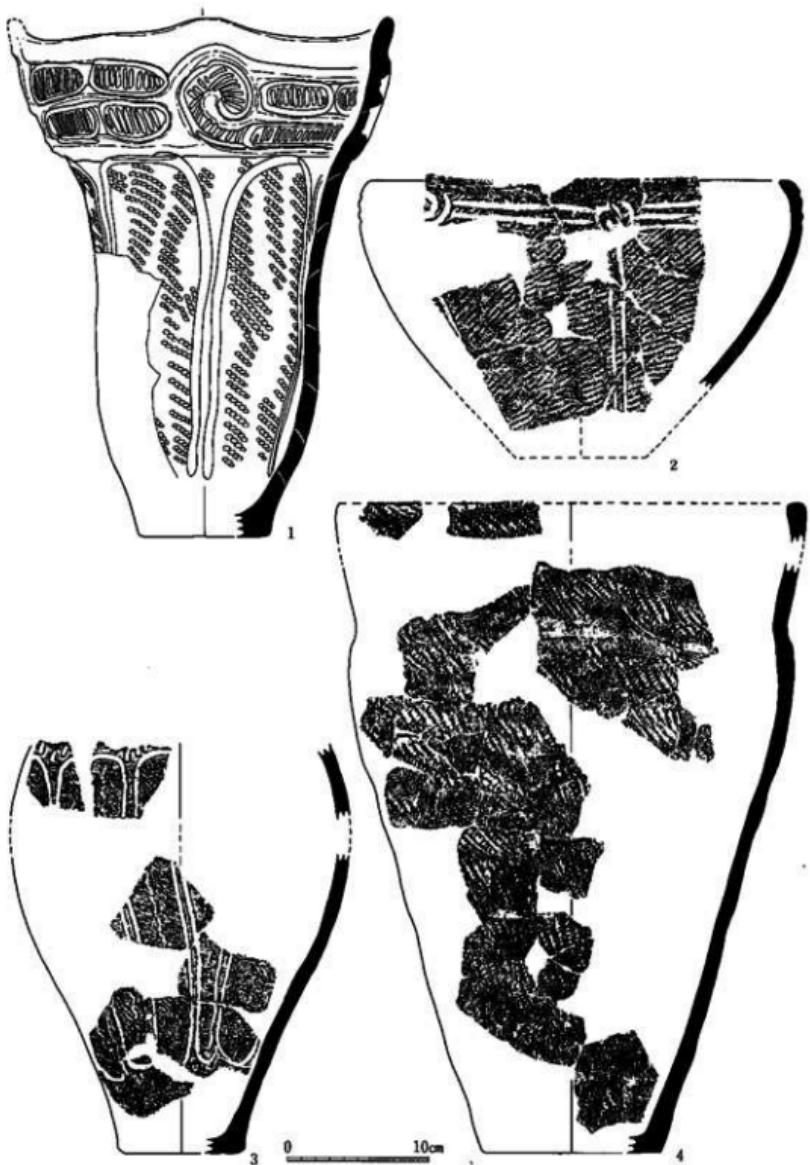


图25 208号住居址出土土器实测图(2)

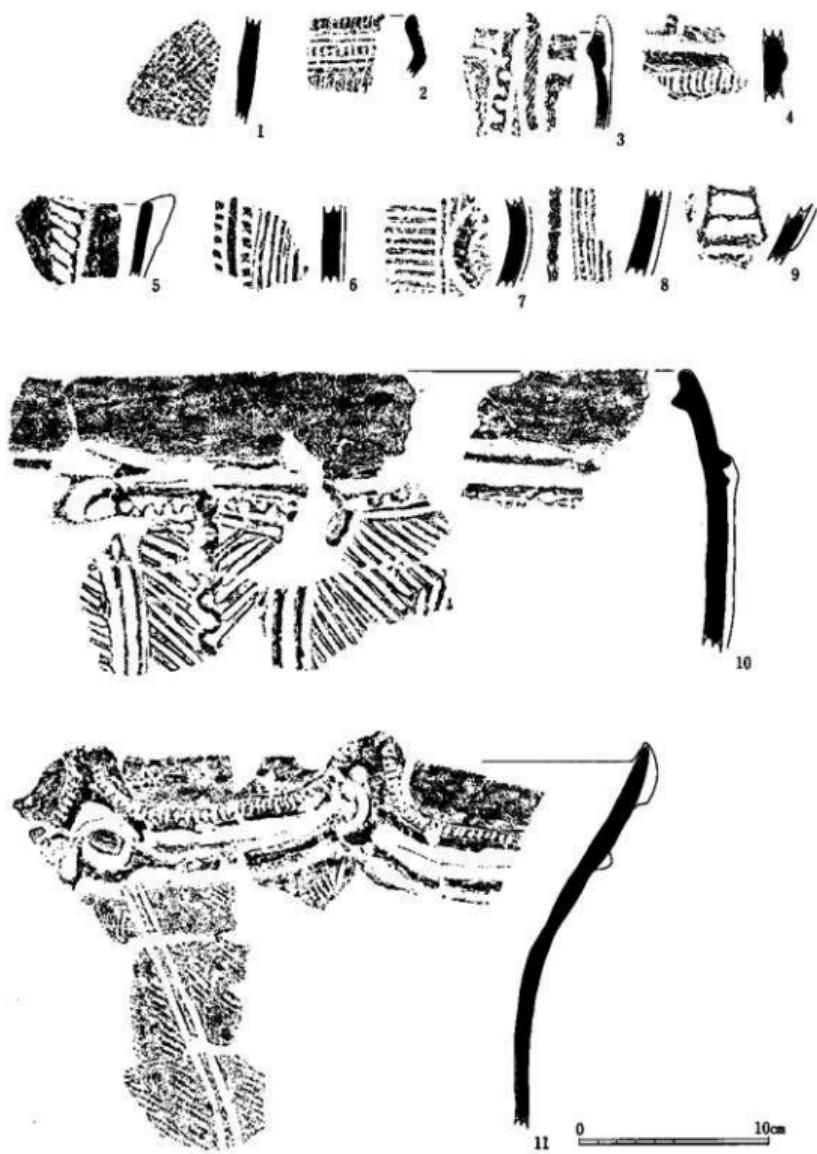


图26 208号居址出土土器拓影(1)



图27 208号住居址出土土器拓影(2)

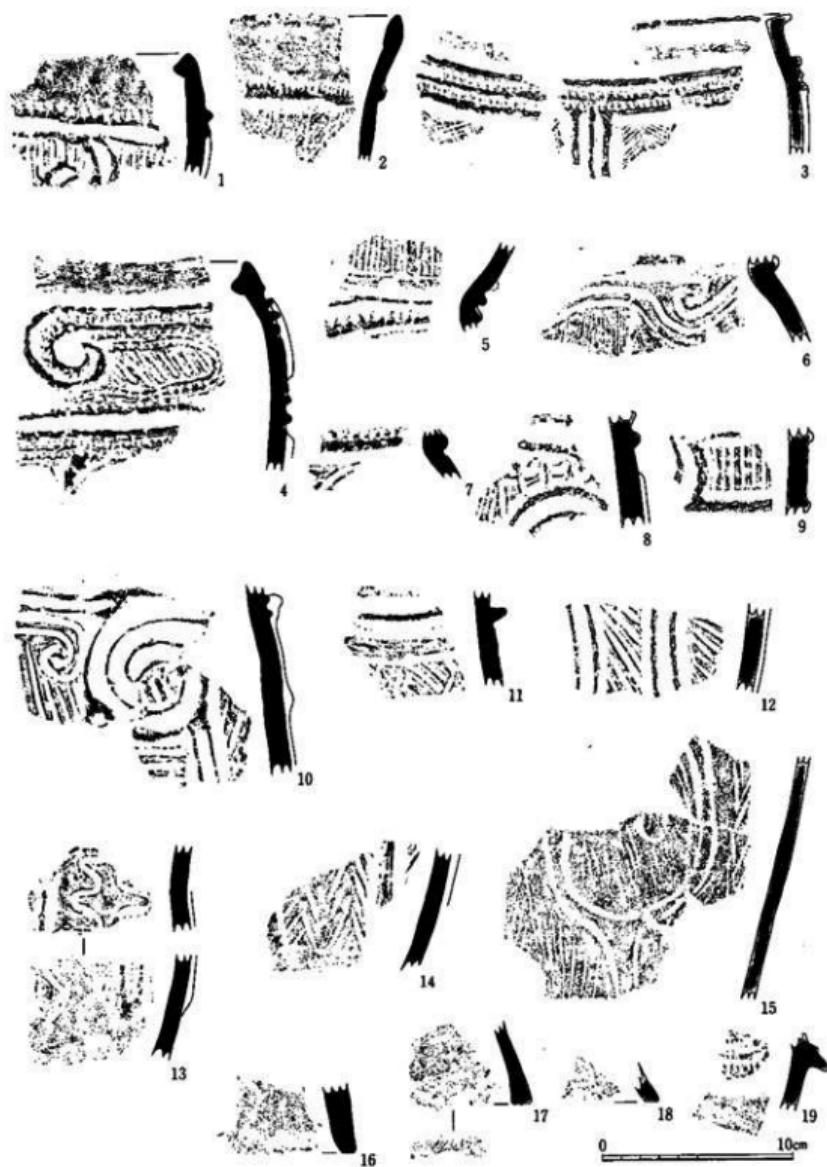


图28 208号居住址出土土器拓影(3)

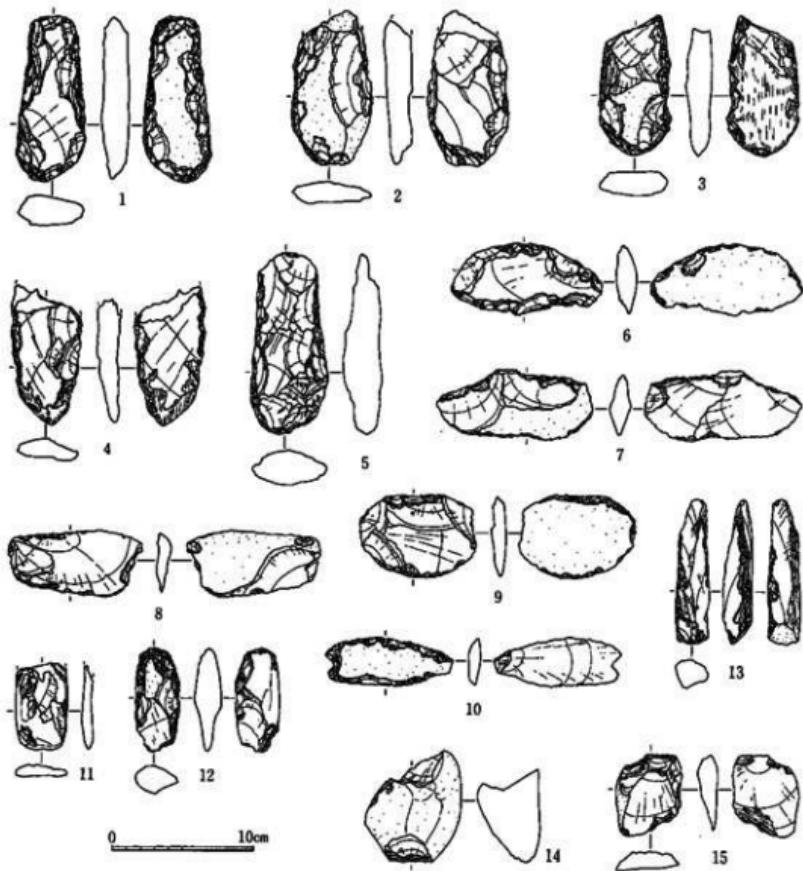


図29 208号住居址出土石器実測図

(3) 209号住居址

BA34グリッドの北縁に検出された径4mほどの小型の住居址である。南側は用地外となるため調査してなく、西壁の一部と炉の南にあたる床の中央部が、擾乱によって大きく破壊されている(図30)。

円形となるものと推定される住居址の平面形は、表土直下で検出された。柱穴はP₁、P₂、P₃と用地外に1本の4本であろうが、いずれも浅い。床面は粘土質黄土を貼ってあって堅く、東側を除く壁下に周溝が廻っている。東壁を切っているP₄は、ピットの東壁に平石を立て、内部には東側により厚く拳大礫の混入する褐色土がはいっているものだが、西側が図の一点鎖線のこと

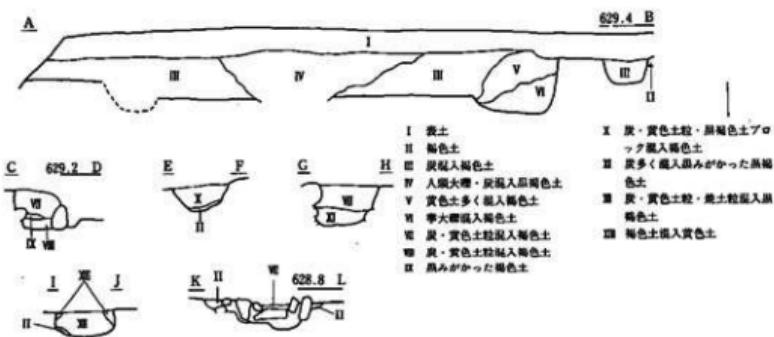
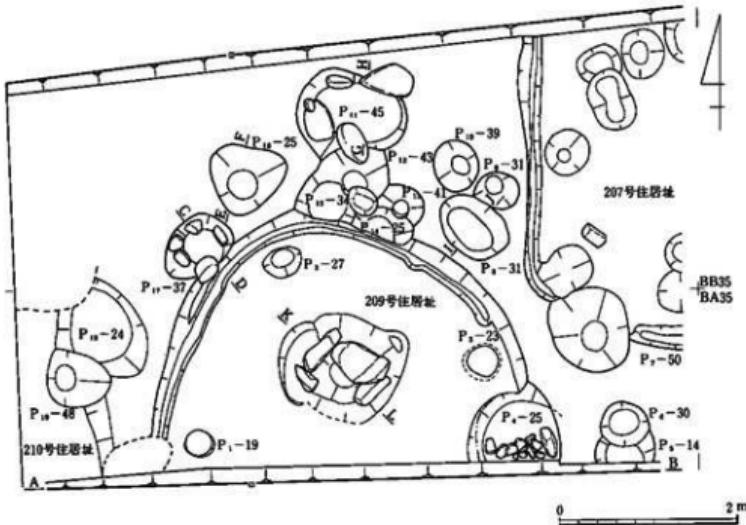


図30 209、210号住居址実測図

ろまで貼り床されており、この住居址に所属する施設であろう。さらに壁外には、P₇、P₁₁、P₁₀といった大型で深いものを含む多数のピットが存在している。そのうち、たとえばP₁₇などはピットの中央に立てたものの周囲を鑿定するかのような状態で礫が残っており、いくつかのピットが、この住居の上屋構造と関連したものである可能性が高い。炉は掘鉢型の石窯炉だが、北西と南東の炉石以外は抜かれ、しかも炉の中央に抜いた石の一つを投げ込んである。その衝撃で石が折れてしまっていることから、廃絶時に他の住居での再利用を試みたものの、劣化が著しかったため、それを断念したとの解釈も成立しよう。

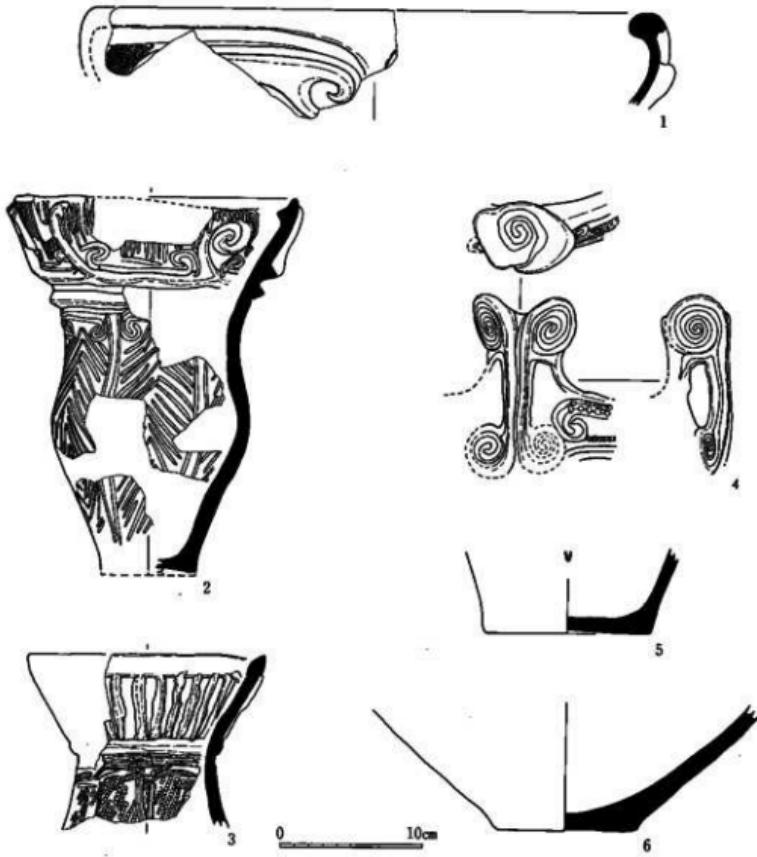


図31 209号住居址出土土器実測図

遺物はさほど多くない。土器（図31・32）は縄文中期中葉や後葉Ⅰ期の混入もあるが、主体は図31-2、3などの中期後葉Ⅱ期の古手で、唐草文系の土器はごく少ない。

石器には打製石斧（図33-12～15）9点、横刃型石器（16）6点、磨製石斧（17、18）2点、礫石錘1点、敲打器（19）2点、叩石2点などがある。

所属時期は出土土器から、縄文中期後葉Ⅱ期の古い段階で、208号住居址より先行する。

なお、住居址北のP₁₁からは、縄文中期中葉とともに後葉Ⅱ期の土器片が多く出土しており（図34）、そのピットが付近の住居廃絶時に開口していた可能性が高い。

(4) 210号住居址

209号住居址の西に平坦な面があり、遺物も出土したので住居址としたものだが、北側が破壊さ

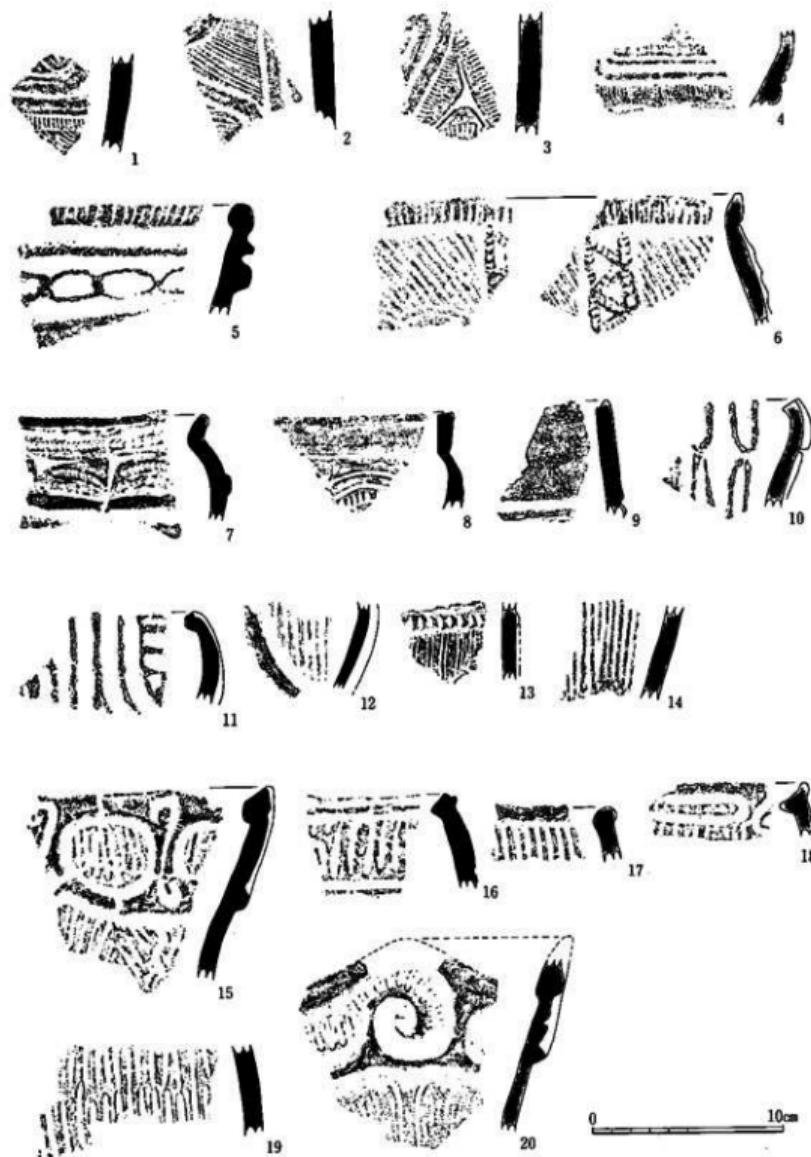


图32 209号住居址出土土器拓影(1)

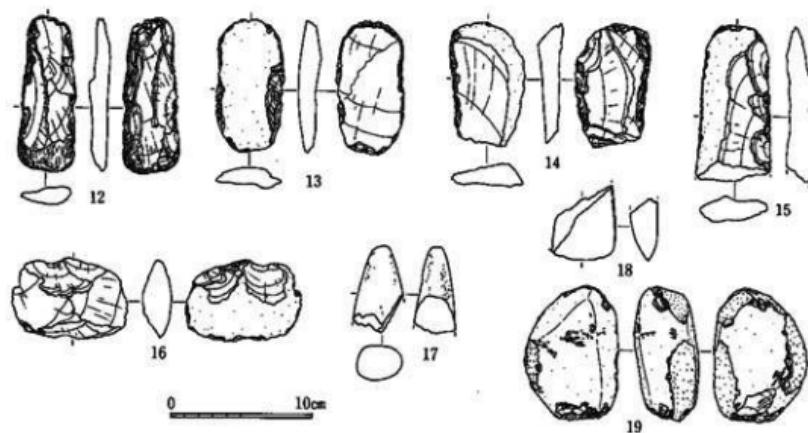
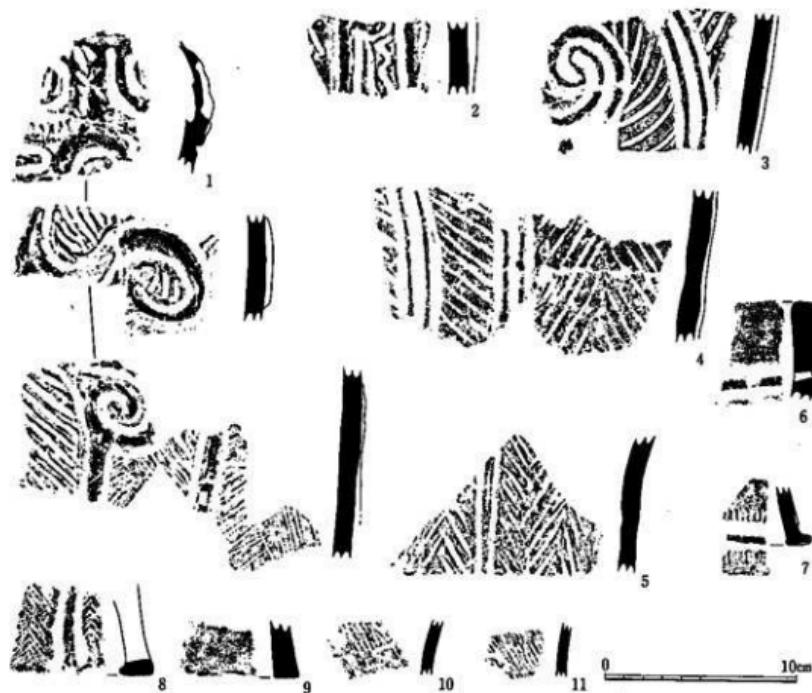


图33 209号住居址出土土器拓影(2)、石器实测图



図34 209号住居址北P₁出土土器拓影

れども、床面施設も指摘するのは難しい。

遺物は少なく、土器（図35）は縄文中期後葉Ⅰ期が主体で、石器には打製石斧5点、叩石1点がある。

出土土器から縄文中期後葉Ⅰ期の遺構である。

(5) 遺構外の遺物

表土下層や遺構が掘り込まれている褐色土中から、少量だが遺物が出土している（図36、37）。主体は縄文中期後葉Ⅰ期で、中期中葉も一定量あり、近くに該期の遺構があろう。

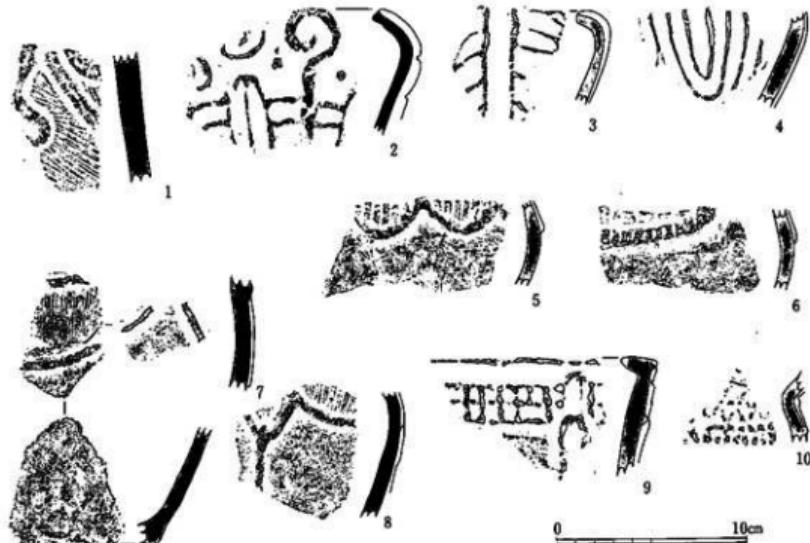


図35 210号住居址出土土器拓影

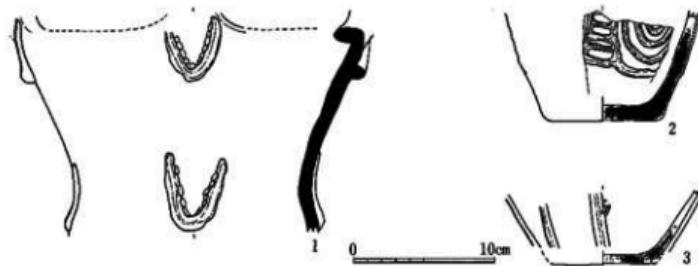


図36 村道775号線遺構外出土土器実測図

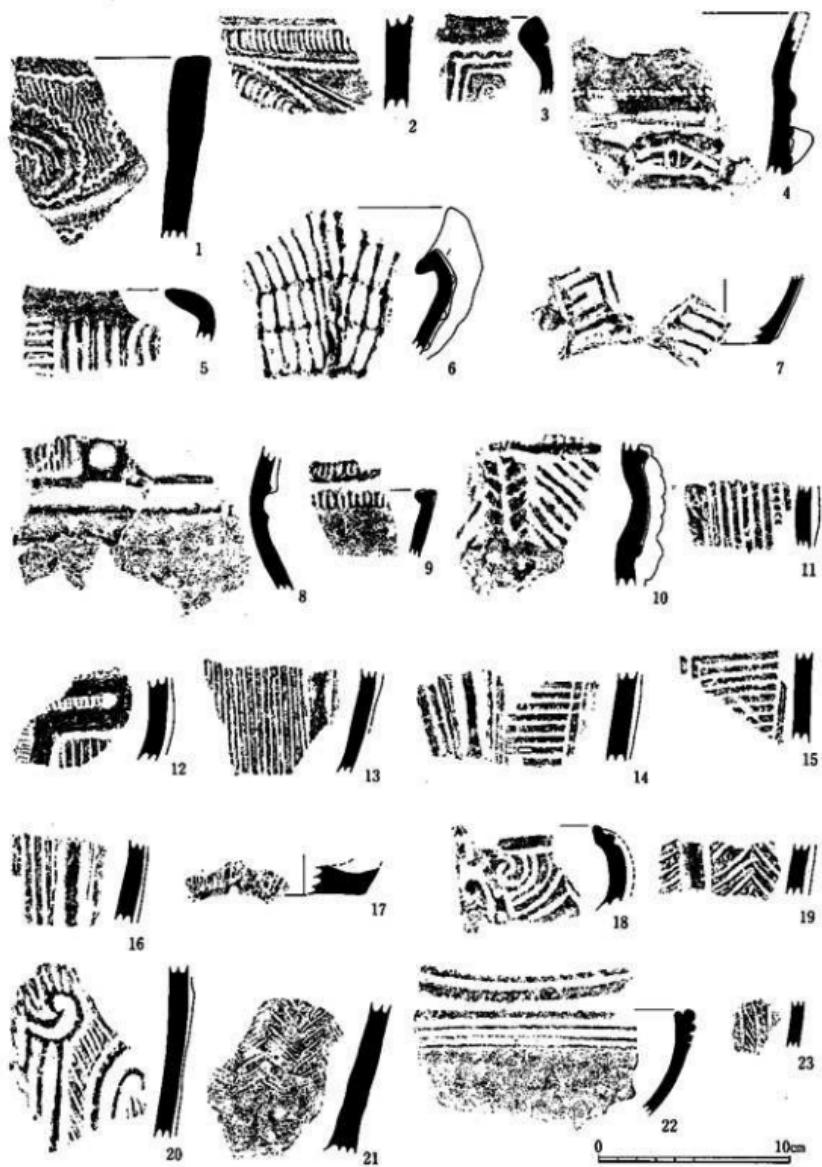


图37 村道775号墓外出土土器拓影

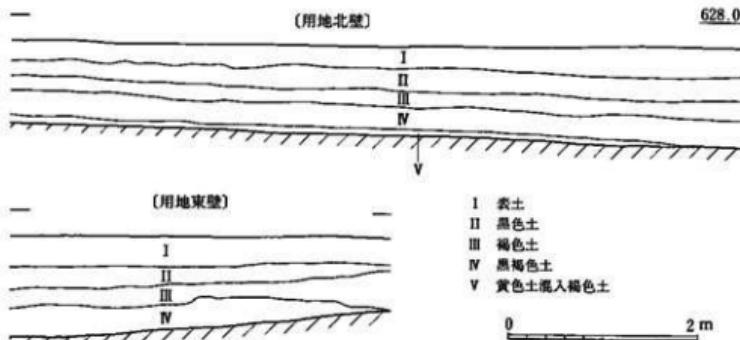


図38 土層図

第3節 防水槽埋設地点

調査したのは、BF40とBG40グリッドにまたがる、南北7m、東西8mの方形の範囲である。土層をみると（図38）、表土下に黒色土（II層）があり、以下褐色土（III層）、黒褐色土（IV層）、黄色土混入褐色土（V層）となっている。V層は下へいくほど黄色味が強くなっており、その下が黄色土となるのだろう。図38の土層図下面までが遺物包含層である。

掘りあがった遺物包含層下面是、北北東方向にゆるく傾斜しており、現地形でも観察できる調査地点北にある東南東方向に向かう溝の、南の縁に相当すると考えられる。遺物包含層下面で不規則なピットや黄色土の盛り上がりも観察されたが、人工的な遺構はない。

遺物は調査範囲の東側に多く、層位的にみるとIII層が最も多い。土色が前記の溝の埋没過程を反映しているとすると、多くの遺物は、溝がある程度埋まりかけた時に、調査地点の東側からさらに東のあたりという場所を意識しながら廃棄されたということになろう。またII層が南側にほとんどないことから、溝はごく最近までかなりはっきりしたものであった可能性が高い。

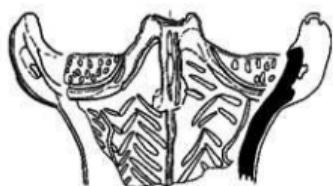


図39 出土土器実測図

土器は縄文時代の中期初頭（図40-1～9）や中葉（10～14）もあるが主体は中期後葉（図39、図40-15～20、図41、図42-1～13）で、中でもII期が多い。また後期初頭のまとまった資料（14～25、図43-1～5）も出土している。図43-8は弥生時代の条痕文である。

石器は32点の打製石斧（9～13）のほか、乳棒状石斧3点（14・15）、小型磨製石斧2点（16・17）、礫石錐7点（18～21）が目に付く。



图40 消防防火水槽用地出土土器拓影(1)

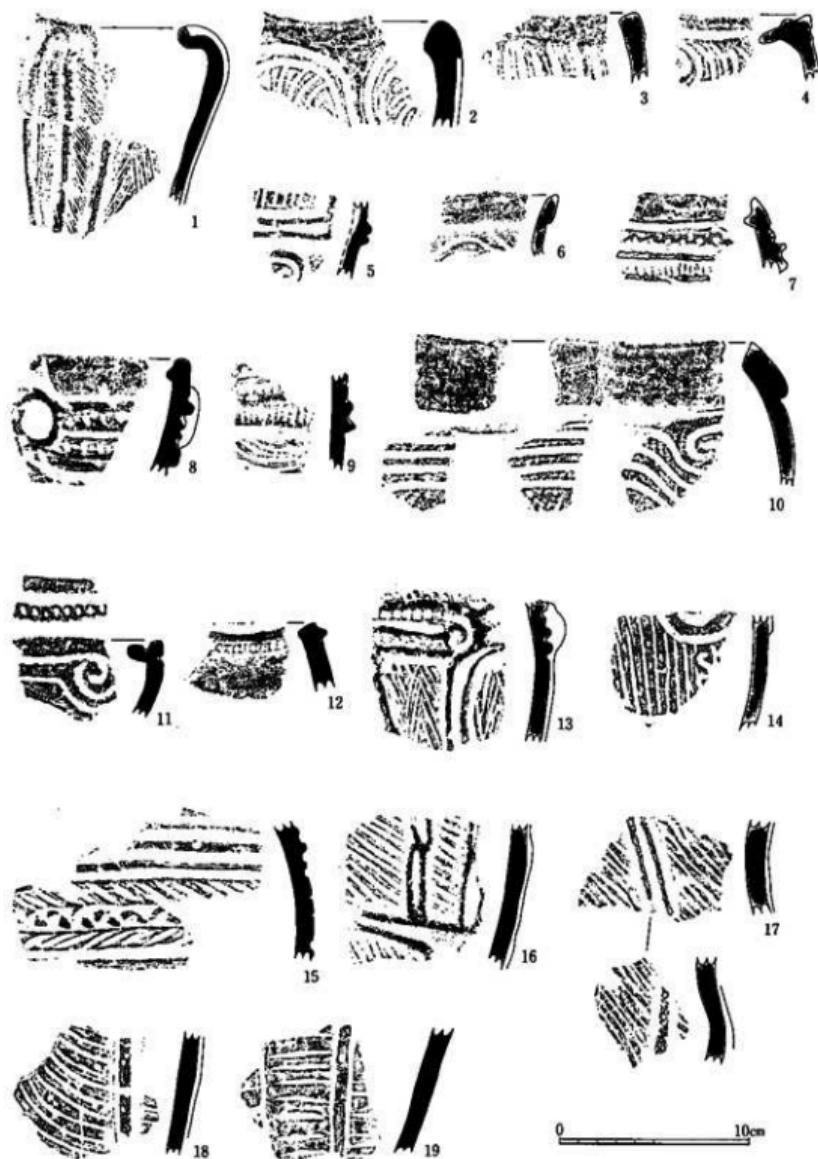


图41 消防防火水槽用地出土土器拓影(2)

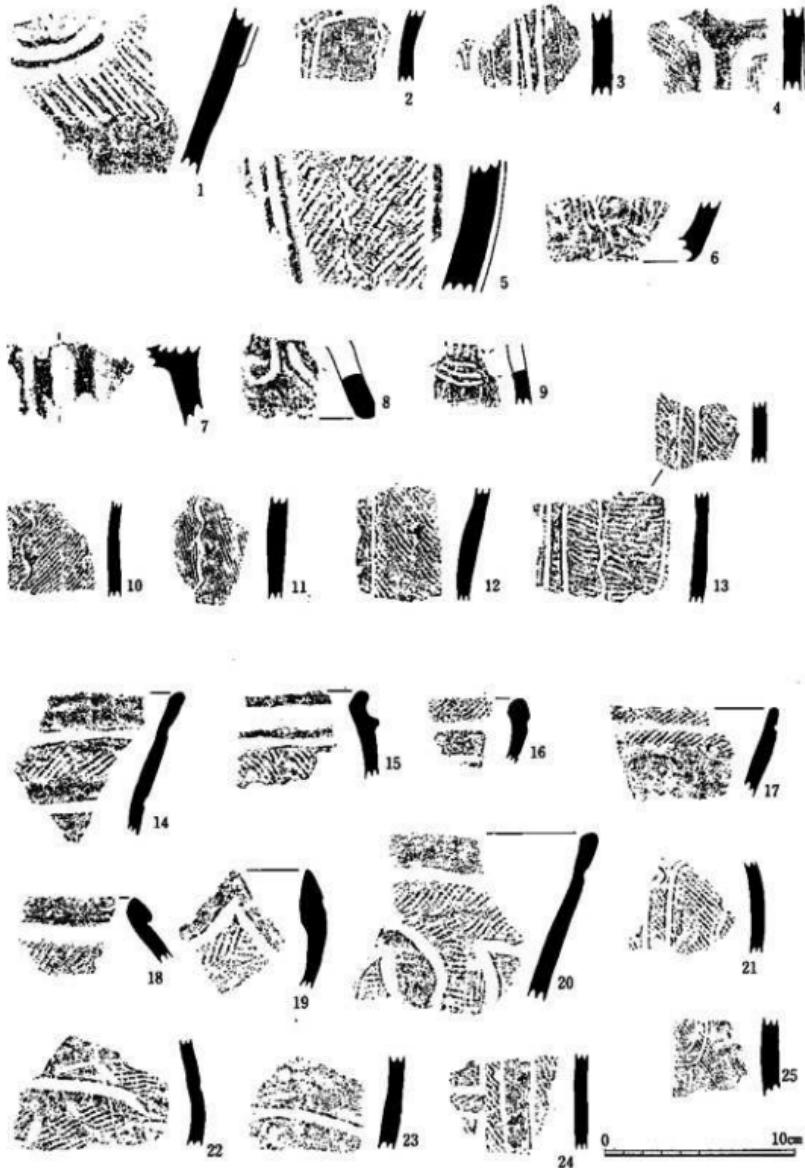


图42 消防防火水槽用地出土土器拓影(3)

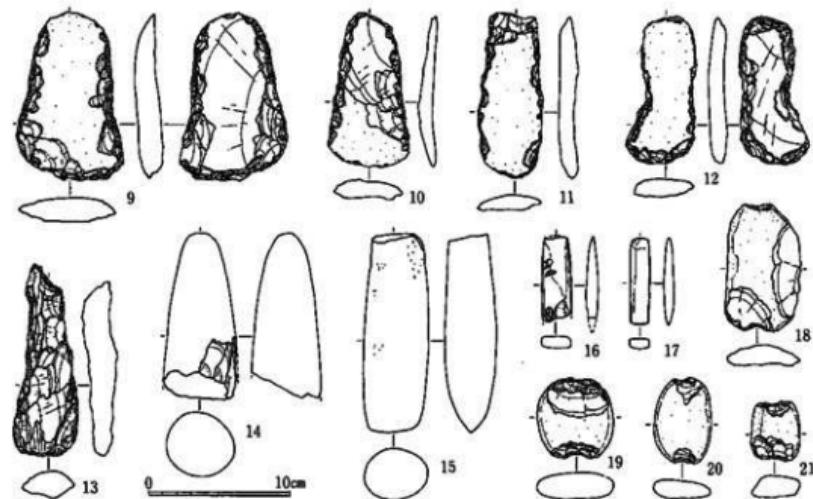
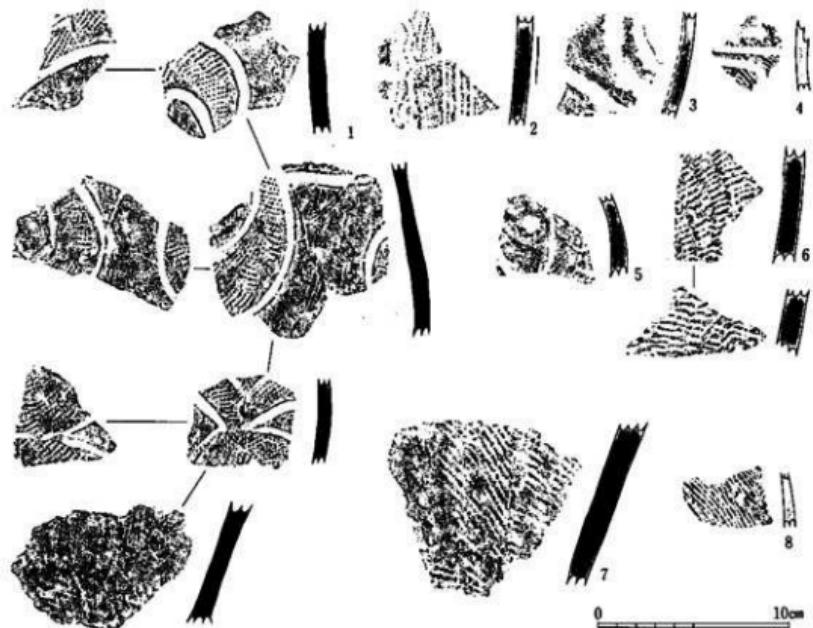


圖43 消防防火水槽用地出土土器拓影(4)、石器實測圖

第3章 発掘調査の成果

広大な中越遺跡の中で、長期に継続している調査なのだが、道路部分を発掘してきたために、各所で実施してきた住宅建設に伴う発掘調査の成果をあわせても、遺跡の中の集落構造がなかなか鮮明に見えてこない。しかし今回、新しい発見もあり、いくつかのデータを蓄積したことも事実である。以下、羅列的ではあるが、それらを記してみよう。

第一は平安時代の住居址の発見であろう。従来も該期の遺物は出土しており、特に今回の調査地点の西方で実施した西原土地区画整理事業に伴う第10次調査で、かなり多くの遺物と該期のピットが発見されたことから、住居址などより生活色の強い遺構の検出が待たれていただけに、貴重な発見ということができよう。ただこの時期は、平安時代の中で、新しい土地へと進出することが極端に盛んな時期であり、現象としては特異ではない。

第二に台地南縁近くでの縄文時代前期の住居址の発見があげられる。単独でその時期の遺物包含層もないことから、まったく孤立した住居址であり、このことによって従来考えられていた該期の集落の規模等に変更を加えなければならないものではないが、中越遺跡の縄文時代前期としては最末期の遺構であり、前期集落の消滅過程を考える上で、示唆に富む発見であることと、出土した一括土器によって、過去の調査で出土していた同種の土器の時間的な位置づけが可能になった点は大きな成果といわなければならない。

第三に今回の調査は、縄文時代中期の集落構造や住居址の立地を考える上での、新しいヒントを与えてくれたように思う。従来縄文時代中期の住居址は台地南縁に細長く展開しており、集落は、南に広い開放的な空間を持って存在していたというイメージが強かったのだが、今までの調査で、住居は台地の南縁というよりも、縁より数十m内側に少なくとも2本ある、台地上を東西に走る溝に添って展開しているように見えるのである。全体の地形よりも、溝とか比高差といった台地上での微地形の変化の方が、集落立地を決定する要因としては強いのではないだろうか。中越遺跡の縄文時代中期の集落全体を見ることはできないが、今後の住宅建設に伴う調査では、この点に留意しながら調査を進めていきたい。

遺構を伴わなかったものの、防火水槽用地での縄文時代後期初頭のまとまった遺物も見逃せない。将来、該期の遺構が必ず発見されるものと思う。

このように、多くの成果と新たな課題を提供してくれた平成4年度の調査であった。しかしそれも、現場で土にまみれ、夏の暑い日に焼かれながらジョレンや移植ゴテを武器に埋土と戦ってくれた皆さんのがいなければ、なし得なかつたことである。作業にあたられた皆さんにあらためて感謝し、調査のまとめとしたい。

図 版



204号住居址検出状況



206号住居址検出状況



村道775号線全景（東より）



村道775号線全景（西より）



208号住居址址



209号住居址址



防火水槽埋設地点調査状況



防火水槽埋設地点土層

西原土地区画整理事業第1工区
第12次調査報告書

中越遺跡

平成5年3月31日 発行

発行 宮田村遺跡調査会

印 刷 ほおづき書籍社
長野市橋原2133-5
